



新局玉

石

瞽者成編前未聞
斯文婦幼代書傳

童子訓

曲亭老翁口授編

一陽齋後豐國畫

第二版自第三十

六回至第四十四

書肆文溪堂精刊

新局玉石童子訓下帙五冊自第二十六回至四十回總目錄

○卷之三下冊 第三十六回

善惡少年月下爭雌雄 復多財染六郎喪多財

○卷之四上冊 第三十七回

成勝通能遊歷赴東路 暗賢睡松下被蜈蚣吞

○卷之四下冊 第三十八回

秘罪過晴賢訪阿健 小忠二怒逐朱之人

○卷之五上冊 第三十九回

非情根抵妙美奇瘡 刑餘細人迭驚機

○卷之五下冊 第四十回

吾足齋奉不孟詳往事 晚稻拂袖獨正閨



三賀志智双

政賢たかあきのまさかみ

まけのまゆらなれ
ゆとつあれたあな
さくらんまゆら
死をほさす
羊間人

信夫晚稻

志のあけし



近江判官

高頼たかより

將擇福艾
危而後安

三賀典膳

政朝たかちか

コノイロ...

戰者必傷
勝者自強



吾足齋

延明



高嶋有見

好純

措名

錦上添花
有
雪中鏡炭幾



福富小忠

延明





彼岸
あはれなるは
身より草花
のきみ 雕窩老

寺僕柿八
てらをとしと
くさなかり

隠沼女僧
くねぬの
あまの

三十一口童子川

四ノ上

八ノ下



日暮
嵐をばあ
若せす
五れ法もか
整る齋

信夫老亭
まの
おの

三池宿六
みけの
さくらの

三十一口童子川

八ノ下

題簞笠先生隱居

関 弘道

蕭蕭脩竹遶第廬

雨笠烟簞一老漁

紫石潭頭閑下筆

釣來新著幾篇書

関賢才者二世與予同好友也童年嗣父祖箕裘而善書且嗜詩云劣孫興邦嚮得此詩即呈閱於予吟誦之間唱歎有餘蓋才之長短不由老弱譬彼我之年歲相距六十有一于茲老而顧已似有庭徑矣彼出藍之所稀自今而後上達可知時童子訓が二版刷人告成因而叨取以録於簡端餘紙

弘化二年如月清明前一日

著作堂老秃



新局玉石童子訓卷之三下冊

東都 曲亭主人人口授編次

第三十六回

善悪少年月下雌雄を争ふ
財を復しと朱六郎財を喪ふ

前回十五屋九四郎が店舗の段落葉乙藝が會話の言と聲と縁の重々たる文と續て却説登時未朱之公野十士の夜小紛れて久く外面在り店の柱小身と倚て既小細聞をりける落葉乙藝親子の再會其過去来の話説小胆と怯多且呆れり肚裏小思を争ふ誰か知るべ死那乙藝の俺も亦豫も那名をりりぞ知りる異母半そ女兄品る小夏への最奇大然で大和の阿懐も実の女兒小引れて主張始小同小から俺今阿容々々と恥と刃心にて裏面小入る哀乞とも那金二百九十五兩と送る俺返さる僅小五兩十兩の効財を

玉石童子訓 卷之三

四ノ下

世間とて。愁ふ面出まを。脂取らるる長談。とらひつゝ鈍りて。その智恵も
 元者不似たり。又前中九四郎が金五兩と茶六ふ齋へ。俺と趕せり。とらひか
 と俺這里へ来ぬ途。遭さるれば。非如今茶六が折よくかへり来
 るとも。ヨマ寡の知れる五兩金。往方定め俺逆旅の路費。不足ぐもあつて。所
 詮窘れ人を頼も。其懐と當せよ。元自那財囊と撻攫ひて。走ら西
 東まされ世を渡る本銭あり。噫嘻。介人と云人の恩と思ひぬ。非美の本性計較
 既不定りて。情地ふ四下と見かへ。這時十八日の月出て。外面の稍明る。ふこ見れ
 拾筆子の邊。朝夕暖簾と上下する。釣竿の長は。是れ九段と合拍て。
 閑送りたる戸の間より。裏面の光景と覗ふ。落葉乙藝の位。笑ひつ。過去來の
 物語。外と見え。暇る。九四郎も亦。愀然と眼を閉ふ。又は。其會話
 うちつて在り。か。朱之介の便と。とらひ合笑。釣竿と徐々と刺伸して。

落葉が投捨る。那財囊の登櫃の頭。ふ在り。と。闇の方より。引掛て。情地ふ
 奪合らま。介程ふ。峯張茶六郎。通能。御宗朱之介と。趕んと。六市四摠と
 從へ。連り。路と。走る。是日下晡の。時候。浪速の。申明亭。造る。情地ふ
 其頭の人。ふ。同ふ。既ふ。朱之介の。追放。せられて。那地。め。見知る。者。且。其時
 刻。と。尋る。ふ。兩。三。响。已。前。より。と。とらひ。ふ。力。及。び。只。得。其。首。より。思ひ。捨。る。亦
 復路。と。い。そ。死。つ。住吉の。里。か。へ。來。ぬ。程。ふ。六。市。四。摠。も。壯。佼。な。れ。も。囚。牢。疲。勞
 あり。故。に。還。さ。る。路。と。走。り。世。話。を。許。立。り。て。お。息。を。と。ま。れ。と。途。中。茶
 六。相。別。き。く。茶。六。は。身。單。や。い。と。い。て。立。ち。息。を。と。ま。れ。既。日。暮。れ。とも。い
 る。月。の。出。き。時。候。十三。屋。の。店。前。近。く。か。へ。來。ぬ。ふ。夏。夜。な。れ。ば。戸。を。閉。果。さ。ま
 裏。面。の。老。女。客。あり。て。九。四。郎。乙。藝。と。頼。と。合。て。うち。譚。ふ。聲。や。と。く。六。訝。り。て
 左右。ろ。く。入。ら。ぬ。又。只。那。客。の。と。ら。ひ。拾。筆。子。の。邊。ふ。人。あり。て。竊。聞。ふ。者。ふ。似

たり。甲夜闇るれば見えざる縁と老女客の伴當歎と思ふのめも他も亦蚊小整
 らむと厭むと。潜びて在る疑ふべし。是臆心見ふあらざるや。と猜多う敢て駭馬を
 開が儘庇回ふ身と潜して内外の容子を覗ふ程小身寄る長脚蚊と拂ひ
 猶覗ふと一响許料らむと知る落葉乙藝の親子の再會長談の奇く妙る
 る幾條の感嘆多うありける程小夜既初更過て月出て影涼しく相端近
 飛螢の風小撲れて隊るもわりの朶六今這月の光小就る。悄や小頭と出く
 件の臆心見と孰々視時他が單面せむ拭の風小吹れて落しか疑ふくもあま
 する。昨日も今も陣館で既小面と見知りたる末朱之次へ心悄地誑と
 原來他の要ある故小潜びて多るをあらむむらへ何とてや内小入らるると思ひ
 伝聲と被む猶も窺る程小朱之次は是を知らむ。悄地小鉤竿と刺伸と
 件の財囊と引掛て竿と小繰り引よまる小框の邊に燈火の光届く暗るけふ。

落葉乙藝九四郎さ心其里のあらば盗見あると臺も知りむ只峯張朶
 六の見るに既小分明るれば且驚且怒不堪と性起ると推鎮めて思ふや。噫
 無慙やる朱之次奴が賊心る。後闇の事とせむとも明々地小哀乞つ落葉の
 刀自の慈善する俺舎兄の義使る。財囊の金子小左ま右ま盤纏の為小
 幾十金百金とも惜むととる。取せざるにやある。并と恥て盗と恥とせむ愚物の
 本性憎むべし。推捕ら捷懲を目今金子とる復さむの俺かり来る甲斐の
 ると尋思とあつ又よ思はば這里で那奴と捷懲して二包一財囊る金子と
 とる復さむ易けれも然して那刀自の慈善するも恃るく且俺兄の為の恥を
 一霎時遣過し這頭と離れてせ術ありと深念と多う猶身を潜めて在りける
 程小朱之次は財囊の金子と既小盗合りかばうち戴た懐に楚と夾めて退く
 時落るも拭合揚る。單面を竊歩ま浪速の方小逃去と朶六と吐嗟

とむろの虫く底間より立出て相距と十間許月と便小跟くも善少悪少道
 異なるれも走る同首夏の夜吹風涼を更初て人定近くりかけ然れば時十
 三屋の店内の落葉乙藝が今昔の話説稍果一か九四郎の惘然する頭を
 拾は膝を找め更落葉小向してひき離合時あり福福齊く至らば抑
 乙藝が不幸なる奶々小相別ある今十あまの九の春秋を歴て憶りる再
 會の本意と遂に俺二親の素懐小稱ふ己も深く歎びあは是併
 慈悲積善と宗とあ御身の老後と神佛の憐みせぬ感感應利益
 とそあら然ば御身年來苦勞して守育ぬひる姪女斧柄刀袷とあらの
 孝順小きて短命るけ其代小年五より棄て生死も知るよりる實の
 女見とぬぬ斧柄刀袷及むも他も孝順の心さるんや斯は俺九四郎の
 今へへ御身の女婿大和津園同郷ならねと一臂の力と盡すべし心と憂

のい孫か。と詞徐小慰むれば乙藝も亦俱小ひき。瓢形の天鑛金の地小多し生
 恩返さより玉銚の身の薄命といひる下の上と七まが。歳長て今料ら
 ども環會まより一過世ありける幸さる開も九歳の秋よりを養ひの因浅くぬ
 這里る故の家主人御夫婦の慈悲微りせ今よの歎びあは。是小就ても痛
 きた家尊の大人木偶の東路ありて還らぬ人の數小入りや山の恨あよと
 いひつくと泣沈め落葉も涙とちかき。現小其親子兄弟うちも揃ひ
 仁義の家小養れぬ汝の果報過世あるる皆九四藏主御夫婦の慈恩
 とよもあまのあり俺身ると及んや縁小觸ぬる身の幸小猶願をたはらひ
 九四郎小うち向ひく喃女婿の刀袷斯は卒小似れと知らる如く大和
 柚木の家の續く者る。朱之小と義絶あ斧柄が迷ふ孤る玉五郎ありと
 ども他小生れて五十日小至ぬ赤子されば憑かむと辟水の上る泡小似る

非如成長あるとも久後短た老が身のよう後見ままもあらむ願ねがふ御身ごんと
 藝げととも俱とも小上市こじちる家いへ小親こせり来きてま杉木すぎきの跡あとをつ嗣つねかり豪農ごうのう名家めいけるね
 とも二十町八反にじゅうちやうはつはんの田園でんえんあり又また年毎としごと小伐こぎせま山やまの林はやしも少すくるかねねい衣い食く小物こものとたく
 もゆるら然しからぬ奴家やつしやの隱居いんきよ居すて佛ほとけ小仕こしまりてん六むの毛けと憑よるものとのりまく
 九四郎くわじやう沈吟しんげんしてその亦また要えあるものらる必かなや輕諾けいだくの信しん寡くわと古語こごもののりまく
 むと今いま即坐すま決定けつていの答こたへ及およん勿論むろん俺家おれがの幸さい小弟せいでい采さい六むあり他の武ぶ士し之の武ぶ藝げ
 之親おのやの後のちと嗣つ足たりれり其頭そのかぶの後のち安やすけれども已いがた隨意じゆい世よと渡わたる九四郎くわじやう分ぶん際さい
 少すくく熟じやくれぬ農家のうけの一世いっせい帯たいとよう美嗣みしぐもあらむ俺身おれがの左ひだりも右みぎもあらむ便べん
 寡くわに御身ごんの為ため小異こい日ひ乙藝おのげとまあらむまへへ幾いくまも留とど在あらる各おので商しやう量りやう敵てきあらむ
 まう便べん宜ぎ口くちの言こと又またのままま御身ごんの又また遠とほからると一いっ個この孫まごとのりまく開ひいて
 其藝おのげ小問こもんぬねとわられて乙藝おのげも俱ともあらむ俺身おれが良よ人ひと小仕こしより十稔じゆしぜん近ちかくらぬ

とと子ことの者もののりがさかりし今いま茲こゝ春はるより身み重おもくありて三月さんがつ四月しがつのりける
 程ほど折をり思おもひうける禍わざ鬼おに起おこりて稍さ久ひさく獄舎ごくや小敷つきれたら必かな傷やぶ
 産うまはるらんと思おもひ胸むね安やすららるら肌は膚ぶ小掛かける護まもり身み囊ふくろ小藏くらめく
 深信しんじん息いきらるける長谷清水ながせみずの両りやう觀くわん世せ音おん及および除す厄やく弘こう法ぽう大師だいしの御影ごえいの利益りやく
 也やあらけん俺身おれがの胎たい内うちる赤子せきしと恙やまあらむかと告つぐらるら落お垂ち兼かね飲のびて
 吁あいまのり介からぬ俺身おれがも亦また子孫こそんあり喃なん九四郎くわじやう主しゆ諄しんたら老おいの癖くせをら御ご
 身み耕かり耘る技わざの熟じやくれるともけらるらあらむ老かう女によの咱それをらまの年とし來きた備ひ作さく
 きて人ひと並なら秋あきの登のぼりるまりいくまり乙藝おのげ共とも侶りよ小杉木こすぎきの家いへと嗣つねかり其子こ
 宝たからを大和たいたくへ移して久ひさ後ごのり安やすらるべし開ひを乙藝おのげのり召よひまりて御身ごん獨ひとり宿しゆく
 也やあらむ俺心おれがこゝろ何なにを安やすらるべしいくまりと請談せいだんされば九四郎くわじやう頭かぶと傾かたける這こ御ご
 店みせの俺親おれがおやより讓ゆるらるまりあらむ六市むくいち四よ摠とつ小任こにん用もちせる俺身おれが大和たいたくの

程住とも開る左も右ものりるから。明日又米六四郎腋子小告と商量を
後小是非と定めぬと答る折々杜四郎の咳は奥より出て九四郎は
其藝と呼び争う。夜の深き小店の戸鎖客人と納戸へ伴ひぬる。米六
哥々が今までもかへり来ざる心許る。猶戸鎖さざると族ぬと問ふ
九四郎少あぢ否米六と遅くとも六市四摠と俱一れば他が上後安ら
且這方へと傍小召に。更小落葉小向ひて争う。嚮小も既小のけり。少
年の俺故女兄の腹をける大江大人の蔭子也。杜四郎成勝是多。這回米
六と共侶小朱之小乙其藝等の疑獄と解ける一人を以て告げ落葉の席と
譲りて開るよ折小拜面志はる。奴家乙其藝の實の母大和の落葉で傍
か。と名告と四郎いうち夢々咱も甲夜より奥の間也。御話語の條々送
もろく洩聞され感心の外ぬる。俺も亦九四郎米六の外任小へとも米六と

弟兄の思ひとさへ做と者るまじく意せらるるもあらむ。やよ嫂々更蘭は小
奶々いさそる冷やうるら納戸へ伴ひぬる。と云乙其藝の點頭。然小奥へ臥
簞と儲け。母と休せらるる。喃奶々甲夜也不如意小焦燥ぬけ。授
捨られ那財囊其頭小とあらむ。令納ぬぬと。とらさる落葉の
心つた。寔小然小介るら平生の鏝一文でも棄てうと思ひありある主人主
婦の方正さ小強難く性起りけ。一百九十五両ある財囊と侵小投捨
去。歳小似け。竟短慮も。痛痛く思れけ。俺後方小あつた。乙其藝者
一看合ひてよ。と云ふ乙其藝の燈の灯口と其方へ引向けて身と起。左右
と件の財囊と索る小。あぢくもあらむ。杜四郎も指燭を。店の
履場箱招牌の蔭までも。漏る隈る求捕れとも。那地ぬけ。あぢくも
落葉。後悔ぬ。九四郎眉とち頻卑めて。原来外面小盗見あり。



谷名氏

玉石童子川卷下



るく
朱六の
逐れて
朱之介
夜
財囊を
擲る

朱之介

るく

三石童子川卷下

事ゆ紛れて掻攫ひけん甲夜虫殊不熱りければ漫小風を食りて店の戸を二
田送たる由断大敵脱落小けりと悔恨め落葉の連の嗟嘆して金銀ハ
上る御宝聊人も受戴たり用物も取らぬと誰も知りたるは清
情婦女子の胸狭く悲泣心狂あてや苟且ながら二包の金子と疎忽の
ずい是も覚る俺身の失誤左ても右ても那金の無益不喪ふ時節を
やよひ藝四郎腋子もうち捨措めんと制められても疑ひ解ねば藝四
郎へ慰めく世の常言小七も索ねて後の人を疑へといふもあれはと
續更して同処を幾番も索るかひをるりける話分両頭介程の峯張染六
郎通能へ末朱之次が後と跟てゆく約十町許既不住吉の里と離れて右
川あり左小隈防あり逃へた岐路ありと尋ねれば究竟と去向と揣り脚
蟲めり聲高き盗見等と喚禁れば朱之次の驚き後方を見入る程

おもあらせむ染六蠅く跳菟りて項髪捉て動せむ怒まる聲と震立て
刑餘の魑魅見朱之次陣館まで面善るる峯張染六を忘れさせ剛才
十二屋の店前まで休が竊とて走りぬ財囊の金子とて復えんと跟て
来ぬと知らざるや夙く返せと懐へんと刺入れて抜出さ財囊と楚と合林
暗たる前髪猴子の金二百九十五両へ俺大和よりて来る俺物なれ
俺物もを休小干る支やある盗見喚り外聞やあ放さむやと挑合りて
逃んとする染六も毫も透さむ肩尖抓て掖戻さむ件の財囊と捉を
放さぬ朱之次自得の白丁術を盡して挑争ふ一生懸命財囊を後方へ
投退さむ染六の怒小堪む身小両刀と帯さ甲斐小敷も果さの易け
とも然しそ亦落葉の刀自の歎れやまらんと思ふ可小敢其本事と盡さ
一霎時他と疲労して拉んと思ひく示受々々挑む程小天の雲の雨催ひ

今まで明る夏に夜の月を隠し、朦朧と忽地暗くするにけり。浩処、
 一個の行客、年齢四十有餘、身中單衣を結折る。上小重標、
 雨衣の身半るるをうち披て、腰短に両刀を跨ぎ、是則武士の
 頭小戴く竹皮笠、脚小絆草鞋の打扮さへ、精悍な故ありぬ。
 べき夜の行小伴をも俱せ、只一人住吉の方より、歩と又蝸めく來りけり。
 程小今、朱六と朱之次が挑角ふと遙小見せ、うち駭馬に近づいて來て相距
 一丈許、勝負什麼と覘ふ程、小月、忽地雲隠とあり、四下小暗く
 る。一かど又只件の行客、忽心や動れけん、竊歩をたれと出せ、今朱
 之次が投りける財囊と左右と搔撈り、會揚試小重けし、バ憶む、楚
 介と微笑く、多々、紐を解開せ、那二包百九十五兩の金子をの、懐に楚
 と夾めて、又搔撈小恰好小石兩箇あり、是究竟と搔合りて、悄地財囊

入替へ、故の如く小紐さへ結び、ありける處へ、蝸く、那身を躲あせ、
 往方へ知らざるにけり。兩虎食を争ふ時、狐其虚小乘と、古語の
 現小以、有哉、然、は這方の兩敵を、迷小是を見せ、知らざる猶も争ふ、
 程小天、月、の雲、齊く、影復鮮明、けし、は、朱六、是、小便宜を、
 疲勞、朱之次、耶と聲を、投り、か、朱之次、の、助、斗り、つ、嬉子の像
 小平張く、亟ち起り、ぬき、を、朱六、透さ、を、登り、鬼り、つ、背、踏
 締て、動せ、ま、勇る、聲、高、身、ふ、や、れ、朱之次、思ひ、知る、や、那、金、百、九、十、五、兩、の
 你、が、大、和、より、り、く、來、ぬ、と、い、ども、原、是、落、葉、の、刀、自、の、慈、善、を、
 と、唐、布、を、買、せ、ん、と、你、小、遞、與、と、出、処、あ、ら、ば、今、朝、浪、速、を、陣、
 落、葉、小、返、し、ぬ、り、を、你、も、甲、夜、より、竊、聞、し、必、や、知、ら、ん、然、
 了、と、も、那、折、小、你、刀、自、對、面、し、て、明、々、地、小、哀、乞、つ、素、より、刀、自、を、慈

善の人るの時宜ふらうて那金子とおれち盤纏ばんぢんの為ためと取らとるるを
 おれち何とぞぬま竊ぬすて走いる其賊情そのちげうを懲とがえんとおれち俺おれ這里ここまで跟つく
 今那金子いまあのうねと會復あひかへして落葉おちたの刀やいば自まづ返かへさすおれち俺おれ身の慾よくお做し
 事ことるおれちえや憎にくむおれち勝かちつるおれち你おれちが賊心ちげうこころ有あるおれちべしと思おもひおれちざりけおれち俺おれ兄あに九四
 郎らうの義ぎ使つかるおれち你おれちの舊惡ふるあくある故ゆゑえとおれち單ひと追放おしやうせられおれちと殊ことお不便ふびんお思おも
 の故ゆゑお金かね五兩ごらうと齋いして俺おれ課かせおれち追おせおれち時とき後あとれて及およば日暮ひぐして徒たら
 かり来きおけおれち十三屋じゅうさんやの門かど傍そばわおれち你おれちが甲夜かや間まお立た給たまひおれちて裏面うらおもての容よう子こと張ちやう
 居ゐるおれちと見み出だしおれちれおれちも訝おどろしおれちさおれち聲こゑをおれち被ひぎおれち裏面うらおもてお入いらおれちざおれち況まはれおれちや件くだんの金かね
 五兩ごらうを渡わた與よとおれち時宜ときがらおれちねおれち吉きち又またの茲ここお及およぶおれちのおれち俺おれ兄あにの好意こういと空あふ
 做しえおれちいおれちまおれちまおれちぐおれちゆおれちるおれち落葉おちたの金子かねと會復あひかへまおれちは則すなはち是こゝ公道こうどうと俺おれ兄あにの賊ちげうと
 傳つたへ取とりおれちまおれちるおれち人情にんじやうと公道こうどうと人情にんじやうと両りやうさおれちらおれち綱つなへおれちくおれちまおれち你おれち這こゝ美みと辨わ知ちるおれち

今いまよりいまみいまぐいまらいまういま新あらたしあらたくあらた落葉おちたの刀やいば自まづの義絶ぎせつの塔かどへおれち故ゆゑお謙断けんたんせおれちらおれちるおれち
 大和やまとへおれち返かへされおれちばおれち俺おれ嫂せう乙おと藝ぎあるおれち義絶ぎせつの弟あによりおれち十三屋じゅうさんやへおれち立た入いるおれちべおれちくおれち後あと
 まおれちでおれち忘わるおれちるおれちと思おもひおれちの隨まお罵のの懲ちやうして却さ懐なとおれち搦な撈らておれち紙し小こ包づつ一ひと金かね五兩ごらうと并ならび
 儘ままお會あひおれち出だしおれちて卒すつとおれちむおれちるおれちお朱しゆ之の頭あたまへおれち托たく地ちと投付な與よへおれちるおれちを儘まま此こゝ下くだ退たい
 紀き月つきと燭あかりお四下よしたと見るおれちお朱しゆ之の頭あたまへおれち投退なけるおれち財囊さいふの故ゆゑの儘ままおして後方あと八はち
 尺しゃくの間まお在ありおれち茶ちや六む是こゝと會あひおれち上ありおれちて沙さちおれち拂はひおれちて懐なへおれち夾くわめておれちいおれちそおれち夜よの路みち十三屋じゅうさんやと
 投なげおれちたおれちるおれち程ほどお十八日じゅうはちにちの月影つきかげも真夜半まよるう時とき候ありおれちけおれちりおれちのおれち亦また程ほどお朱しゆ之の頭あたまと
 鶴つる一ひと身みと龜かめゆおれちるおれち屣かき四下よしたと見みらおれちるおれちお朱しゆ六む之の故ゆゑの路みちかおれちりおれち西にしへおれちあおれちるおれちるおれちるおれちるおれち
 身みと起おこして茶ちや六むが投與なへおれちるおれち金かね五兩ごらうと搔かきおれち合あひおれちりおれちて包づつと開ひらきおれち見みて嘆なげ
 口氣くわいきして其金子そのかねと包づつて先ま積た鼻はな禪ぜんへ結むす着くわても東西とうし足あしらぬ身みの往方ゆくへは定さだ
 ぬ難なくおれち只ただ詩うた々と唾つばくおれちちおれち折角せつかく物ものを金かね二ふた包づつと茶ちや六む奴やつお會復あひかへされおれちて其その損料そんりやう

中五両金是と落葉と乙藝者も新緑金の廉けれども斧柄の産
後身故りて生まらば赤子の恙ありと落葉が口説き一愁歡話を竊
聞あるもあまの金子の竭る比小情地の大和へ赴き又物小は
時宜もあらん只是星然也好も歹れも七轉八起ねる男子あ
先京師生を退てせぬ術ありと獨言胸逞に虎狼の本性情
と膝と塗まてる壤と拂ひつ拵磨りて身と起し悠々と東を投立
去ける跡の取鳴虫の聲土旺中央立秋風小戦や隄防の細芒も招
穴の二進一退出沒不測の久後も猶怖るべし案下某生再説當晩十三
屋の店內の乙藝杜四郎の財囊の金子と索難の精疲労らて竊れ
と聲を思ひ絶る店の戸を鎖んとてを掛る折ら外面より來る者あり
是則朱六之近し隨小聲を被て嫂々目今より傍ら其里崩るゝ

乙藝者杜四郎も噫遅り待不承り疾這方へと閉る戸又一枚
推開け六朱六を衝と找を入りて坐して九四郎に向ひて
四摠と共に走り申明亭造りし朱六之の亭午の時候追放され
と聲をのこす時後れ往方も知れぬ只得る來る程六市四摠の疲勞堪
世話の許止宿を明日参らんとて別れり是よりと俺身單日暮る這
店舗頭生既か入り來けるふ又不慮のありて見過がて裏面
其の後の宣示と告るを九四郎うち使る開る何れも知らぬと這里
甲夜小賊難ありそを今急告るとも益る一這客人の和郎も安知那
上市るる落葉の刀自る乙藝の實の奶をりしと今宵不測知る
朱六恭く落葉に向ひて口誼を舒き落葉もやと膝を找め初對
面の鉄びと盡さ詞の露の間乙藝の店舗を戸鎖果る杜四郎と共に朱六

うち向ひて甲夜小落葉が喪ひたる。那財囊の金百九十五兩の事云云といひ出
 る。と朱六も歩もあむ。其後の咄もよく知り。今詳小説示さる。刀自由長兄も歩も
 其故の箇様々々と甲夜小朱之次が這店頭小潛ひ来て主客の話を盗
 聞きて財囊の金子を竊合する時朱六もその瀾窺居り推捉へ捷懲へ金
 子と合復さす。思ひかとも然りて。又落葉の刀自の為小妙さ出まは朱之次が
 竊を以て浪速の方へ立去折十町許跟ひたる。如此々々の地方也。噺禁め所
 闘ふて思ひの随ふ投伏て件の財囊ととり復さる。九四郎が合せぬる。金五兩を
 投與て。うり来りけ。顛末も今見る如く説誇り。懐より其財囊と合さ
 落葉小返さあむ。九四郎落葉と首也。杜四郎も乙藝さ。膝の杖も覺
 ぬ。心俱小感嘆ささける。當下落葉の羞る色あり。九四郎乙藝示向ひて
 以て。這金子の失する。朱之次が所為る。然る。惜む。なぐも。估ら。一旦

れ取せ。る。金子も者。と明々地小。乞ひ。後。闇。事。と。あ。これ。八。四。討。顔。面
 朱六主小。とり復されける。鈍まり。ゆふ。といひ。財囊と合。拾。九四郎。急。推
 禁めて。親。中。も。念。の。為。内。と。聞。て。受。合。ぬ。と。心。屬。れ。然。入。と。答。る。財
 囊の。紐。と。解。開。して。合。せ。二。包。の。金子。小。あ。む。小。石。是。ハ。什。麼。と。む。り。小
 呆。れて。む。と。投。出。せ。九四郎。乙。藝。杜。四郎。も。俱。小。訝。る。开。が。中。小。朱。六。も。驚。き。て。そ
 且。恥。且。悔。て。い。ま。う。原。来。夙。も。朱。之。次。奴。が。財。囊。小。石。と。容。易。て。俺。を。欺。は。し
 る。の。ん。然。と。ハ。知。ら。疎。忽。の。態。儼。と。解。く。た。も。面。目。る。那。里。ま。も。趕。着。て。
 金子。合。復。さ。で。む。己。ん。と。と。い。ひ。も。刀。と。合。て。身。と。起。さ。九四郎。も。吸。禁
 め。朱。六。も。ら。ら。勞。を。功。り。和。郎。幾。里。趕。ふ。と。も。逃。る。者。ハ。路。と。擇。ま。他
 處。と。和。郎。を。俟。ん。や。敦。圍。く。と。も。今。ハ。要。る。端。も。不。仔。細。と。告。よ。か。と。い。は。れ。て
 朱。六。嗟。嘆。小。堪。む。姑。且。と。答。る。今。現。小。初。心。ぬ。今。あ。不。身。の。非。と。飾。る。似。れ。も。



三石章子

十六年七

九四郎

おちえ



染六を制
めて九四郎
意見と示と

三石章子

十六年七

九四郎

染六

朱之众が那金子と竊合を首より俺胸窺て由断せむ并儘迹と跟畏る。投
 伏して這財囊ととり復た終まて他いふあては這小石と容易る暇あり。但挑
 角へ折他財囊と投退し照る月益可小雲隠れ。一霎時暗く做かどこれ招
 久遠と出あらむ。雌雄と争ふ折る小三回上臂をふる。他何もの暇あり。然る
 科玉と要せんや。是不由て是と思へ。這小石は朱之众が竊合を以前より財
 囊の内におりける。欲其のる。と以時へよく奇くまき怪し。斯と知らば這店頭
 朱之众と推捉へ。財囊ととり復た。りし落葉の刀自の心と汲て地方と易
 た。故小を照据人あり。るれば俺分説も闇たふ似。悔まるととてけり。と脚言
 なく。陳むれば。藝杜四郎も慰難て左あら右あ。と。俱小疑解る。けり。の
 段文猶多ければ。いも説も盡まら。又巻も更て下回小解分ると聽絲か。

新局玉石童子訓卷之三下冊終

